

令和4年度防災分野のデータプラットフォーム整備にむけた調査検討業務  
技術検討ワーキンググループ(第2回)  
議事要旨

1. 日時

令和5年1月17日(火) 15:00~17:00

2. 出席者

大野委員、柴崎委員、中村委員、眞野委員、武藤委員(50音順)  
内閣府(防災担当)、デジタル庁、(国研)防災科学技術研究所

3. 議事次第

- (1) 本事業概要の振り返り
- (2) 関連事業の状況報告
- (3) 本調査事業の検討状況について
- (4) 今後の予定

4. 議事要旨

内閣府・デジタル庁より、本事業の概要の振り返りや関連事業の検討状況を説明したのち、本調査事業の検討状況を報告した。各委員からは以下の意見等があった。

【(1)本事業概要の振り返り・(2)関連事業の状況報告 について】

- 防災DX官民共創協議会の活動において、民間事業者のみによる検討では、本会議検討との乖離が予想され、専ら民間に任せるのではなく、本事業の動向も踏まえデジタル庁等も適切に連携して検討に取り組むことが望ましいと考える。

【(3)本調査事業の検討状況 について】

- 一般的に、システムアーキテクチャの設計は、実現したい業務、必要な機能、機能間で流通するデータの順で検討するものであるが、本事業では、それらを並行して検討しているように思える。実際には、理想通りには進められないことは承知するが、あるデータが流通した際に、実現したい業務のための機能が漏れなく抽出されているか確認が必要である。想定されるユースケース・特定の業務が完遂できる機能までを考慮しておき、その後に機能追加できるように考えておくとよい。

- アーキテクチャの検討においては、システムを構成する複数の機能に分解して検討する前に、ステークホルダーやオブジェクトの流れ、目的を明確に定義したうえで機能要件・非機能要件を検討する必要がある。また、アーキテクチャには、実装に関わる事項が含まれないよう整理した方がよい。そのため、用語を明確に定義して用いるべきである。
- IoT 機器が生成するデータ流通について検討する際には、アーキテクチャの検討段階で、データのハンドリング方法（ストリーミング処理、バッチ処理等）に伴って課題が存在することに留意するとよい。
- 現在 SNS 情報などは、マスメディアや自治体が既に国民から収集し取り扱っている。このような情報の使用を制限せず分散型を志向したデータ流通を前提にアーキテクチャを設計するか、流通するデータの仕様に一定の共通化を図る前提でアーキテクチャを設計するかも含め考慮して検討する必要がある。
- 災害時のデータは経時的に変化するため、静的・動的データの定義、更新方法、利用者への更新の通知方法についても検討する重要性が高いと考える。
- 全てのデータ項目の網羅的な洗い出しから着手するのではなく、プラットフォーム上で流通することが現実的なデータから重点的に整理検討するとよい。
- データ流通に必要な運用ルール検討のためには、ヒアリング等で現場の実態・オペレーション、ニーズを把握し、またユースケースをできるだけ実務に即して作成して検討するとよい。
- ユースケースは、過去の実績だけではなく、想定されるシナリオ（問題とその解決策等）も考慮し、具体的に記述するとよい。
- 各情報共有グループでのユースケース作成について、それぞれのユースケースが該当する災害対応フェーズを明確にした方がよい。
- データに関するガバナンスの構築のためには、データの提供や仲介を行う者の役割や責任を明確に示すことが重要である。
- 運用ルールでは、流通データの信頼性や責任の所在の明確化など、詳細な議論が必要となってくると考える。
- データカタログの検討では、データセットの他にも使用条件やリソース、付帯情報にも留意して検討する必要があると考える。